

木村 古賀さんが「塔」の歌でどんなことを大事にしたいなと思ってらっしゃいますか。

古賀 「塔」の歌で、それは高安先生の主義に準ずると思う。自分をしっかり持って、あんまり右顧左眄しないで、自分の歌を作るべきだと思う。それが一番大事ですよ。だから、人が新しい歌作ったからといって何も真似することないしね、自分は自分の個性をしっかり持って自分の歌を作るということ、それ一番大事。私はそう思いますね。歌壇でどうとかそんなんではなしにね、本当に歌が好きだったらやっぱり自分の歌を大事にして自分の歌を作ることだと思いますね。何も人のために作ってるんじゃないからね、自分のために作ってるんです。今の「塔」は人数は増えてるかわりに、もういろんな歌があるじゃない。だから、迷う人はやっぱり迷うわけよね。こんな新しいのを作るとかね、そんなことはあんまり考えんでよろしい。自分は自分の歌で通したらいいわけよ。自分の歌を大事にして、一生懸命作っていきたいと思いますね。それが一番やっぱりいいんじゃないかな。

木村 いつもよく言われてますよね、「私」が歌えるから歌が好きだって。

古賀 そうなの。歌ってそんなもんですよ。歌集なんかでもそうだけどね、生きてるわけでしょう。その人の生きた姿が出てくるから歌集というのはおもしろいんですよ。だから、私は頭で作った歌とかそういう歌は嫌い、はっきり言ってね。だったら小説書く方がいいですよ。生の軌跡、生きてる軌跡ね、それが出てなかったらその人の歌集と言えないですよ。こっちもそういう歌集を真剣になって読みたいと思うしね。言葉のおもしろさとか、そういうことだけで作ってる、そういう歌は私は感心しないね。その人という人が浮かんでくる、そういう歌集がいいと思いますね。

木村 古賀さんが一番感銘を受けた歌ってありますか。

古賀 亡くなった人で言えば、斎藤史なんかやっぱり私尊敬する。あの人は最初、十代は本当にロマンチックな歌作ってたんですよ。だけど、長野県に疎開してから、お母さんとご主人と両手に病人抱えて、あれだけ生きてきたわけでしょう。だから、自分をしっかり歌ってるわけね。死ぬまであの人は歌を離さなかった。だから、私ああいう人は尊敬します。ただ自分はいまからとかでなしに、本当に自分の、あの人も最後になるほど何か赤裸々に歌ってるわけね。ああいう歌はいいと思う。自己をしっかり持つということが一番大事だと思う、結局は。

木村 まだまだ伺いたいことはたくさんあるのですが、きょうはこのくらいで。ありがとうございました。これからもお元気で、ご活躍下さい。